

アメリカン・ソーシャルスキル学習における演技の他者評価(2)：4つの中・上級スキルに関する学習者のパフォーマンスに対するネイティブのコメントから

岡山大学文学部・田中 共子
一橋大学大学院法学研究科・高濱 愛

【序】

我々は、アメリカ留学予定者を対象としたアメリカン・ソーシャルスキル学習セッションを開発する試みを続けている(高濱・田中, 2009a, 2009b, 2010a; 田中・高濱, 2008)。先の報告では、セッション中のパフォーマンスについて、アメリカ人のネイティブ評定者に評価を依頼した際の自由記述欄のコメントを、スキル1、3、4、5、6の5つのスキルについて、分析を行った(田中・高濱, 2010)。本稿では、その後半に当たるスキル7、8、9、10の4スキルについて、同様に分析を行い報告するものである。

本セッションは、アメリカに留学する日本人学生を対象にした、異文化間教育の心理教育的セッションとして構成されている。日本の対人行動とアメリカの対人行動は、異なるパターンを持ち、期待される行動と背景にある考え方や、社会的な規範が異なる。日本人学生が特に困難を覚えるのは、主張行動とされている(田中, 1994)。セッションでは臨床心理領域で行われる主張性訓練に着想を得ながら、医療モデルではなくて教育モデルとして、目的や手法を調整したうえで実施されている。つまり行動パターンの矯正や修正ではなくて、行動レパートリーを拡充し、当該文化圏において行動的なオプションを獲得しておき、行動の自由を高める試みである。教室ではロールプレイを用いながら、認知行動的な学修が行われるが、渡航後の現実場面での実施は学習者に一任される。学習者は社会的文脈を参照しながら、自らの意志で行動を選択していく。そこで取り得る有用な行動のリハーサルをしてコツを学んでおくことが、セッションの狙いである。

学習者は、セッションの参加によって、スキルへの自信が高まり、環境移行の不安が低減し、異文化間対人関係形成への動機付けが向上することがわかっている(高濱・田中, 2009a, 2009b; 田中・高濱, 2008)。しかしセッションにおけるパフォーマンスは、主観的には向上したとしても、客観的にはどうなのかも測定しておきたい。そこで第三者であるネイティブに、セッション中のパフォーマンスの記録を見てもらい、それをどう評価するのかを尋ねてみることにした。

他者評定を行うことで、パフォーマンスの評価を多角化することができ、パフォーマンスの質と変化を詳しく知ることができる。また学習者のパフォーマンス向上のための、具体的な助言を収集する役にも立つ。今回は自由記述の部分进行分析の対象としており、数値的な評定は、

稿を改めて報告する予定である。

【方法】

1. 学習セッションについて

設定 セッションの詳細と学習者の反応の概略は、高濱ら（2010b）に報告されている。X大学に所属し、アメリカへの短期交換留学を予定している日本人大学生が、自由意志に基づいて、二日間で合計9時限分のアメリカン・ソーシャルスキル学習セッションに参加した。参加の謝礼は文房具と書籍であった。米国への留学経験者である筆者二名が講師をつとめた。ほかにX大学から日本人学生二名がアシスタント、ネイティブの男子交換留学生1名が助言役として参加した。

学習者 X大学の女子学生4名（S11、S12、S13、S14）。年齢は19歳から22歳。

学習内容 以下の9スキルを順に、初日に初級から中級レベルに該当する5スキル、二日目に中級から上級レベルに該当する4スキルを学習した。スキル1（聞く態度（笑顔、アイコンタクト））、スキル3（友人を作る）、スキル4（先生に質問する・相談に行く）、スキル5（授業で自分の意見を言う）、スキル6（先生に要求を伝える）。スキル7（主張・交渉する）、スキル8（依頼された援助を断る）、スキル9（自己開示する）、スキル10（ジョークを言う）。本稿では、二日目に学ばれたスキル7からスキル10までを取り上げる。

2. パフォーマンスの他者評価について

設定 200X年某月に、P大学の学生と卒業生に調査の主旨を説明し、研究協力を同意した者に、ボランティアとして評定を依頼した。

評定協力者 男性10名、女性2名、合計12名、年齢は20歳代から30歳代のアメリカ人大学生の評定を分析の対象とし、アメリカ人以外の評定者3名の評定は分析から外した。なおスキルによって評定者は若干異なるが、一貫して回答した者のコメントのみを分析するのではなく、内容の広がり重視して、記載された全てのコメントを分析の対象としてある。

評定方法 一つのスキルにつき、練習のために参加者ごとに二度のロールプレイが行われ、記録されている。最初の演技は、課題場面の設定のみを聞いて演じてもらったもの、二回目の演技は、解説を聞きフィードバックを得た後に行われたものである。評定者はDVD再生機のある部屋に集合し、記録されていた各人のスキルのパフォーマンスをみて、評定用紙に評価を記載した。

評定用紙 評定には、日本人学生がセッションで演技を自己評価した項目を英訳して用いた。数量的な評価としては、マイクロ評定（個々の行動）とマクロ評定（全体の印象）に分けて、数項ずつ10件法で評価してもらった。また余白をコメント欄とし、演技の総合評価や演技向上に向けてのアドバイス等があれば自由に記載してくださいと教示した。着眼点の設定は評定者に任せられ、印象などが自由な表現で記された。

分析 本項では、自由記述欄に記された評定者のコメントに焦点を当てる。質的な情報を具体的に紹介し、演技へのコメントとして集約する。さらに自己報告との対応をまとめ、パフォ

パフォーマンスの向上を探った。

【結果】

1. ネイティブ評価者による具体的なコメント

ネイティブ評価者によるコメントの概略を、表1、表2、表3、表4に示した。評価できる点などの肯定的な評価、不足している点などの否定的な評価、向上のための助言、総合的な感想に分けて整理した。「とても」や「やや」などの修飾的な副詞は適宜省いて記した。

スキル7(主張・交渉する)では、一回目には間違いや不足点を挙げる指摘が目立ち、表現や動作がふさわしくない、もっと要求すべきだなどの助言が記されている。褒める場合も、よくできていた、などと簡潔である。しかし二回目には、会話が自然だった、話し方が上手だったなど、詳細を挙げて褒めるコメントがみられる。二回目には間違いの指摘より、もっと理由を言うといい、もっと声を出したらよいなど、改善のための助言がみられる。一回目から二回目にかけて肯定的評価は9人から11人、否定的評価は8人から2人になっていた。

スキル8(依頼された援助を断る)では、一回目には、よかったとする評価もある一方で、ごちなさの指摘が目立つ。二回目には、堅さへの指摘はわずか、向上したとするコメントがみられる。助言点には、ごちなさや堅さの指摘、曖昧さの指摘、提案の仕方などやりとりの内容に踏み込んだ指南、慣れや落ち着きの勧めがみられる。一回目から二回目にかけて肯定的評価は9人から13人、否定的評価は8人から6人になっていた。

スキル9(自己開示する)では、一回目には説明はできているがごちなさ、戸惑っているなど態度の不十分さに注意が向けられ、もっと具体的にとの指摘が行われている。二回目には、生き生きしている、楽しんでいる、スムーズになった、流れがよいなどの、質の高まりが指摘されている。表現の間違いが指摘され、誤解のない正しい言い方になるよう、訂正の助言が行われている。どのように受け取られるかを説明したり、誤解の生じる可能性があることを指摘したり、受け手の視線での解説が提供されている。ほめる場合は、説明できていたことが評価され、言葉の選び方などの細部の指南の他に、流れなどの全体的な印象が評価されていた。一回目から二回目にかけて肯定的評価は11人から12人、否定的評価は9人から6人になっていた。

スキル10(ジョークを言う)では、一回目には冗談を言えなかった者もいて、何か冗談を言うようにとコメントされている。意味の通じにくい冗談もあったとされる。ほめる場合、一回目には単純なほめ方が目立つが、二回目には、冗談の内容やセンスを評価する言葉がみられ、発話者に好感を寄せるコメントもあるが、肯定的なコメント数自体はおおよそ半減していた。単語の選択や文法を直し、話題を適切に選択し、より効果的な表現を使うための助言が行われている。一回目から二回目にかけて肯定的評価は11人から5人、否定的評価は8人から9人になっていた。

2. 演技の自己評価と他者評価の対応

ネイティブ評価者のコメントのうち、二回目の演技に対するものと、演技者の自己評価(高濱ら, 2010b, pp.71-73)との対応を探り、整理した(表5、表6、表7)。原文は英語だが、

表1 ネイティブ評価者による自由記述の概略:スキル7

スキル7 1回目の演技				
	肯定的評価	否定的評価	助言	その他(感想など)
S11	A6:アイコンタクト上達、 A14:よくできていた	A8:確信がなさそうで弱い、 A13:手の動きが少し多く、 そこまであげなくてよい	A17:不便だったのだから2 本ペンを要求すべきだ	A7:返品は難しい。たいて いの場合店員はもっと質問 してくる。
S12	A14:とてもよい	A8:単語が違う、短すぎた、 A9:"Give me my money." は正しくない表現、A11: "Please return my money." は命令のようでこの場合ふ さわしくない、A13:たいして 発言していないが店員が 推測してくれた、A16:表現 間違い	A6:積極的すぎたので落ち 着くように	A7:断りもなく返金してもら うわけにはいかない
S14	A6:よくできた、A7:問題なく 返品できた、A8:よくなった、 A13:十分できた、A14:よか った、A17:店員の話に割り 込むのは大抵はよくない が、この状況では自分の要 件を伝えたいためふさわし かった	A8:説明不足、A13:会話が 短い	—	—

※S13は、スキル7の学習を欠席。

スキル7 2回目の演技				
	肯定的評価	否定的評価	助言	その他(感想など)
S11	A7:ちゃんとやりとりを計算 できていて上達、A13:とても よくできていた、会話が自 然、A16:とてもよかった、す べて理解できた	A8:ごちない	—	—
S12	A6:落ち着いていて自身が ありよくできていた、A7:O K、A13:よくできていた、 A16:とてもよかった	A13:声が小さい	A8:短かったが手とりばや かったのもっと理由をつ けてもよい	—
S14	A6:発音もよく会話の速度 もよい、A7:問題なくなして いた、新しいペンを入手後 の場面も見たい、A13:よく できていて話し方も上手、 A16:よくできていた、A17: かなり緊張していたにもか かわらずとても自然だった	—	A16:もっと声を出した方が よい	—

表2 ネイティブ評価者による自由記述の概略:スキル8

スキル8 1回目の演技				
	肯定的評価	否定的評価	助言	その他(感想など)
S11	A7:よくできていた、「Friday」がよかった、A8:よかった、A12:よかった、A13:とてもよくできていた	A8:ぎこちなかった、A13:指のさし方が少し大き	A6:落ち着いて	—
S12	A7:積極的に「I love to cook」と言ったところがよかった、A13:よくできていた	A8:安全ではない、A13:最後の方は声が小さくなっていった、A17:アメリカ人はこのように立たない	—	—
S13	A8とA9:よかった、A17:すごかった	A8:限られていた、A13:声の音量の差がすこし大き	—	—
S14	A6:よく発表できた、A8:大幅によくなっていた、A13:他の手段を考えていてよかったし、親しみやすかった	A10:本当のシナリオに見えなかった、言葉がフォーマル過ぎた	A7:いつどこでを相談すべき	—

スキル8 2回目の演技				
	肯定的評価	否定的評価	助言	その他(感想など)
S11	A6:よくできていた、A7:よかった、A8:素晴らしい、とてもよくなっていた、A10:よくなっていた、A13:代替案の部分以外はよかった、A17:新しい単語を入れていてよかった	A13:彼女が代替案をだしたところははっきりしていなかった	A6:落ち着いて	—
S12	A6:よい振る舞いだった、A7:かなりよかった、断って自己主張ができていた、A8:とてもよくなっていた、A12:とてもよくできていた、A13:彼女は回答がよくできていた	—	—	—
S13	A7:よかった	A8:少し曖昧、A13:相手の方が提案していた	A6:もう少し落ち着いて	—
S14	A6:よくできていた、A7:よいイントロダクションだった、A8:大幅によくなっていた、A10:スムーズだった	A7:手はポケットから取り出すべき、A10:話し方がかたすぎる、A13:相手の方がたくさん提案していた、初めの方で声が小さく聞きづらかった、A17:相手が代わりに提案をしていたが大したことではない	A7:自信を構築するためになれるのはいいことだ	—

表3 ネイティブ評価者による自由記述の概略:スキル9

スキル9 1回目の演技				
	肯定的評価	否定的評価	助言	その他(感想など)
S11	A7:何をしたのかという説明を少し伝えることができた、A8:よかった	A6:何をしたのかももう少しはっきりと、A8:戸惑いすぎていた、A13:説明が不明確、A17:どうだったのか詳しく説明して	—	—
S12	A7:あまりつまることなく言いたいことがいえていた、A13:よくできていた	A6:自分の経験についてももう少し具体的に説明した方がよい、A8:まあまあだった感じがこちなかった、A13:あまり流暢でない、A17:腕を組んでいてこちなかった	A16:もっと週末について具体例を会話に入れて	—
S13	A7:行動をきちんと表現し説明できていた、A8:他の相手よりも上手でよかった、A13:普通の会話みたいでとても自然、A16:自然で楽しく具体的によかった	—	A6:週末の体験についてもっとはっきりさせて	—
S14	A6:よくできていた、相手に興味を示し週末の説明がうまかった、A7:導入もよく違う単語(busy)を使っていた、A8:まあまあ、A13:内容はよかった	A13:あまり流暢ではなかった	—	—

スキル9 2回目の演技				
	肯定的評価	否定的評価	助言	その他(感想など)
S11	A6:いい演技、A7:最後以外きちんと表現できていた、A8:とてもよくできていた、A10:楽しめてとてもよかった、A13:会話を生き生きとさせ楽しんでいた	A6:少々戸惑っていたところもあった	A8:もう少しスムーズに	A17:私もジョニー・デップが大好きだ
S12	A6:よくできていた、A8:流れがスムーズになってよくなっていた、A17:彼をパーティに誘っていてよかった	A7:お好み焼きbuffetが6時間というのは非現実的、A13:手のしぐさが少し大げさ	—	—
S13	A7:具体例を入れ誰かにたとえていたのは悪くなかった、A13:上手に相手を映画に誘っていた	A8:言葉遣いが違っていた、間違った情報を与えていた	A16:Have a good "weekend"であり、"day"ではない	—
S14	A6:よくできていた、A7:会話がもっと長続きしていた、A13:よい会話だった	A8:間違った意味が伝わっていた、A9:同じことだが"with you"は誤解されてしまうかもしれない、A13:他と比べて活気がなかった	—	—

表4 ネイティブ評価者による自由記述の概略:スキル10

		スキル10 1回目の演技			
		肯定的評価	否定的評価	助言	その他(感想など)
S11	A6とA13:"I like cool people"のコメントは面白かった、A7:よくできていた	A8とA17:冗談がなかった	—	—	
S12	A6:予想外だったがクリエイティブだった、A7:妊娠が冗談でないならば使い方が間違っているが、とてもよかったし冗談もよかった、A9:なぜかとても面白かった、A13:率直で面白かった、A17:頑張っていた	A8:妊娠というのはまちがって面白いが、分かりづらい、A16:少し不謹慎に聞こえた	—	—	
S13	A6:興味深かった、A10:とても面白かった、友達になろう	A8:冗談がない、A13:話に穴が少しあった、発表中に"uhm"(つなぎ語)が多かった。"Let's be friends"(友達になろう)は前振りもなく面白かった、A16:冗談の意味が分からなかった	A7:"Let's be friends"?, A17:何回か繰り返しがあった。納豆のところは面白かったが納豆を食べて見た人にしか伝わらない。たいていの人はなぜそれがいわずらだったのか分からないだろう	—	
S14	A6:自信があつてよかった、A7:まあまあな芝居だった	A6:冗談の意味が分からなかった、A8:冗談がなかった	A17:冗談がなかったので作ってみて	—	
		スキル10 2回目の演技			
		肯定的評価	否定的評価	助言	その他(感想など)
S11	A13:「結婚してください」ではなく「名字を変えてください」にしたのは最高のせりふだった	A8:よくなっていなかった、これといって冗談がなかった、A9:歌うのは少し不自然だ	A7:彼女のユーモアは好きだ下準備が必要だ	A6:カッコいい役者に会えるといいね	
S12	A6:創造性がある表現、A13:かわいかったが話はそれほど面白くなかった。とはいえ笑顔が可愛かったので見る価値があった	A7:文法に気をつけなければならぬ、A8:冗談がなかった、A9:スポーツはlookingではなくwatchingと言った方が正しい	A17:冗談を加えなければならぬ	—	
S13	A7:冗談がよくユーモアもとてもよかった。彼女は素直でよい、A13:あまり面白くなかったが面白い話だった	A7:言葉遣いがあまり普通ではない、A17:外国人だからよかったが体重の話はアメリカではタブーとされている。冗談ではなく自己批判しているように思われるだろう	—	A6:名字が嫌いならば新しい名字が見つかるといいね、A8:彼女と結婚する!	
S14	A7:自分を表現することができていた	A8とA17:冗談がない	A6:怪物の話は面白かったがそこまでmonsterと言わなくてもよかった	—	

表5 「一回目と二回目の演技で変わったと思う点」に関する自由記述にみられる自己評価と他者評価の対応

2回目が変わった点	学習者			
	S11	S12	S13	S14
スキル7	声が大。 自信を心がけた。	特定の表現の使用。 自分の気持ちの伝達、気後れせず堂々とするを心がけた。	—	緊張。案外できる自信。断られてもねばり強く交渉する意欲。
スキル8	ジェスチャー。前向き。	ジェスチャー。自分の積極的な気持ちの伝達を努力。	固くなった。自然さ。	緊張。どう提案するか難しい。楽しい。リラックスするよう慣れたい。
スキル9	内容が詳細。明るい(1)。	ジェスチャーを大に、自分を知らせてもらおうと心がけた。	内容増加。余裕。	アイコンタクトを頑張った。話せて楽しい。
スキル10	話をまとめよう、明るく、好感を持たれようと努力。	好感の持てるジョークを努力。自分も楽しんだ。	内容のまとめ。余裕。	難しい。なかなか出せない。和ませたい。

斜字は非言語、他は言語に関連が深い事柄。下線部はネガティブな内容。

— 部分は欠席のためデータなし。

他者評定のうち2回目の演技に対するものと、自己評価(高濱・田中, 2010, pp.71-73)との対応を示した。二重下線の部分が同じコメントを示す。末尾の括弧内の数は、同様のことを指摘したネイティブ評価者の数を示す。

表6 「二回目の演技で演技者が意識した点」に関する自由記述にみられる自己評価と他者評価の対応

2回目の演技で意識した点	学習者			
	S11	S12	S13	S14
スキル7	よりよい表現。	詰まらず伝える。	—	アイコンタクト。自分には権利があると意識。
スキル8	目を見て話す。	声の感じで分かってもらおう。	いろいろ言おう(でも固まった)。	自分の気持ちを伝えられるように。
スキル9	話の膨らむ内容。	ジェスチャーを大に。	気楽に。	自分のことを伝えたい。
スキル10	ジョークをとばす。	好感を持たれるように。	話題をかえた。	1つでもジョークを。自分なりに頑張った。

— 部分は欠席のためデータなし。

表7 「学習者による実施への意欲と残された課題」に関する自由記述にみられる自己評価と他者評価の対応

3回目への意欲と課題	学習者			
	S11	S12	S13	S14
スキル7	ナチュラルな話し方。	スラスラと会話。	—	学んだことを実際使う。
スキル8	文法間違いを直す。	会話をはずませる。	意識せずに。	楽しくやる。
スキル9	自然な誘い方。	自分をくわしく話す。	ナチュラルに。	相手の話も聞きたい。
スキル10	高度な笑い。	会話にジョークを。	大げさに。	恥を捨て、自分の魅力の1つとしてジョークを使う。

— 部分は欠席のためデータなし。

表では日本語に訳して示した。一回目の演技は予備知識がないことからベースラインに近いが、二回目の演技は、要領を学んだ後のパフォーマンスであり、セッションでの達成点を反映している。学習者による学習後の自己評価の高まりを裏付ける、能力の向上を示唆したのもである。

二回目の演技で変わったと思う点(表5)を尋ねられた学習者は、マイクロ評定に該当する内容としてはアイコンタクトなど、マクロ評定に該当する内容としては堂々とするように心がけたなど、態度に注意を向けたりしている。一方ネイティブ評定者は、マイクロでは英語表現を指摘し、マクロでは提案の仕方や導入の方法など全体の構成に着眼している。両者の着眼点が一致したのは、スキル9のS11で、「明るい」という点のみである。セッションにおける学習者の自己評価は、ネイティブ評価者のコメントとあまり重なっていないといえる。

例えば、スキル8でS13は、二回目の方が固くなった、自然でなくなったと捉えている。しかしその演技をネイティブ評価者は、よかったと評したり、少し曖昧なのでもっとはっきり、自分が提案をしたほうがいい、もっと落ち着いたほうがいいなどと捉えたりしている。本人の主観的緊張は、必ずしも演技に表れているわけではない。またS11は、四つのスキルにおいて、前向きに明るく演技しようと努めている。ネイティブ評価者の方では、それをよかったとするものが多いが、一方で説明の仕方や要求内容に課題を指摘している。

二回目の演技で意識した点(表6)には、マイクロでは「目を見て話す」、マクロでは「好感を持たれるように」などが挙げられている。ネイティブのコメントと重なるところはみあたらない。日本人学生の心がけたことは、総じてかなりシンプルである。

例えばスキル8でS14は、自分の気持ちを伝えられるように、と考えて二回目の演技をした。ネイティブ評価者からは、大幅に良くなった、スムーズだったとほめるコメントと、手の位置や話のかたさに課題を指摘するコメントが得られている。

実施への意欲と課題(表7)については、マイクロでは「文法間違いを直す」、マクロでは「ナチュラルに」などが挙げられているが、ネイティブ評価者との重なりは見られない。日本人学生は総じてワンポイントの簡単な注意を挙げているが、ネイティブ評定者はより細かい助言を行っている。

【考察】

1. ネイティブ評価者による評価

ネイティブ評定者が、学習者のパフォーマンスをどのように評価したのかは、セッションで得たパフォーマンスの完成度を示唆するものであり、実践にあたっての評価と反応を予測するものでもある。セッションでは二回繰り返したのみであり、まだ達成不十分と感じる学習者にとっては、更なる助言は向上の手がかりともなる。フィードバックとして聞けば、課題を自覚したり、自信を高めたりすることもできる。

ネイティブの助言は、言語と非言語の両面に渡っている。マイクロ面では言葉の選び方の助言や文法間違いの修正、要求や説明的確な内容設定、話題選びの適切さ、視線の効果的な使い

方などが言及されている。マクロ面では、好感の高さ、自然さ、流れの良さ、交渉の成功などがコメントされている。伝わる話題や共有できる感覚があるとされ、話者への好感や関心が生じていることが伺える例もある。一方で、理解されないであろう言い方や、共有されない興味、適切と思われない話題や表現も指摘されており、誤解の可能性に言及するものもある。

一回目より二回目の方が、総じてコメントが具体的で、詳しい記載が得られているように思われる。参加者が、要領の学習の後に演技をより緻密に構成し、発話内容が細くなることに対応しているものと思われる。スキル10は、冗談の使い方を扱ったものだが、これは肯定的コメントを与えた人数が減少しており、課題の複雑さと難しさが示唆される。

彼らのコメントの出し方から、各設定場面における日本人学習者のパフォーマンスにとって、何が課題になるかということを考えてみよう。

スキル7（主張・交渉する）では、気後れせずに堂々と、正しい表現で必要な内容を伝えて、交渉する事が求められた。緊張してしまいがちな場面だが、落ち着いて論点をまとめて、きちんと表現することが課題のようである。

スキル8（依頼された援助を断る）は、日本人は思わず遠慮やためらいを覚えがちな場面と思われる。そのためか、演技がぎこちなくなりがちである。主張と提案を組み込んで、曖昧にならず神経質にもならず、伝えたいことを伝えることが課題になるといえる。

スキル9（自己開示する）では、伝えるべきことを伝えることができた、との評価がある一方で、戸惑いや不明瞭、ぎこちなさが指摘された。つまり必要な情報を口にすることはできても、ふさわしい態度を伴わせることに困難があると考えられ、さらに正確な表現を使いながら、よりなめらかな印象を作り出すことが課題と言えらるだろう。

スキル10（ジョークを言う）では、良いところを評価しながらも問題点もかなり指摘するコメントの出し方から、学習者が難しい課題に挑戦していることがわかる。面白い、好きだ、可愛い、見る価値があったといった記述は、対人的な魅力のアピールとしての冗談が機能的に用いられたことを意味しており、この点では話者の意図は達成されている。完成度を上げることは難しいとしても、話題選びや表現に慣れることを課題と考えて、さらに使いこなせるようになれば、強い印象を与える、魅力的な話を提供できるだろう。

2. 自己評定と他者評価の関連

セッションにおける学習者の自己評価は、ネイティブ評価者のコメントとあまり重なっていなかった。ネイティブ評価者は細部と全体に渡って、より丹念に眺めており、学習者が気づかない観点の助言が与えられている。学習者は、自分の気づいた範囲で気を配り、意識できる範囲で行動をコントロールしようとするが、彼らが思いつかない点がまだ多いのかもしれない。

初・中級のスキル（田中ら、2011）の場合と比べて、中・上級のスキルの方が、ネイティブ評価者との乖離が広いように思われる。これは課題の困難度が上がり、日本人学生の一般的な発想では思いつかないような、文化特異的な要領がより多く含まれてくるため、あるいは行動が寄り複雑になるためと考えられるのではないか。

パフォーマンスを評価する視点は、学習者が主観的に感じる完成度や成功度とは異なる。こ

の意味では、ネイティブの視点で眺め、自らのパフォーマンスがどう受け取られるのを知り、自分では想定しえなかった角度の見方や、細やかな観点を提供してもらうことは、学習者にとって興味深いことであろう。シタラムは、「他人と効果的にコミュニケーションしようとするならば、我々はまず第一に、自分自身のコミュニケーション技能について知らなければならない。他の人々を理解しようとする前に、我々自身について知らなくてはならないのである。」と述べている(シタラム, 1985, p262)。今回のような評価手法から得られた内容をさらに返す方法が考案できれば、自分には見えていなかったり気づいていなかったりした点がより把握できるようになり、学習者のパフォーマンス向上に資するであろう。

3. 今後の課題

セッション中は試行錯誤を促すことに力点を置くため、批判的なフィードバックや細かい修正は比較的抑えられている。演技の向上には、良い点をほめて強化すること、工夫と動機付けを高めること、見本を見て取り入れるという、行動療法の着想が活用されている。現在使っているテキストでは、表現の例は示しているが、動作やタイミングは演技例をみたほうが分かりやすい。今回のコメントを手がかりに、解説の際に重要な点をアドバイスすること、見本演技を複数ストックしておくことが有用であろう。今回得られたネイティブの評価視点や助言を、今後のセッションに生かしていくことが課題といえる。

パフォーマンスの評価者と評価の方法については、いくつかの発展系が考えられる。今回のセッションは日本で実施されている。そのためセッションに参加できるネイティブは限定され、このセッションには1名が助言役として参加したに留まる。日本の大学においては、アジア地域からの留学生が多くを占めており、北米からの留学生数はそれに比して極端に少なく、全留学生数の約2パーセントに過ぎない(文部科学省高等教育局学生・留学生課留学生交流室)。ここから考えると、日本の大学でネイティブの参加協力者を得ることは、かなり難しい環境にある。そこで、より多くのネイティブから評価を受けられる学習環境を、いかに整備できるかが課題となる。

例えば、留学先機関の助力を得て、渡航後に現地においてフォローアップセッションを実施していくことは、ひとつの解決策として提案できる。十分な数のネイティブに助言役として参加してもらいながら、現地でセッションを提供していくことができれば、より多様な意見を参照できる。他の認知行動的なスキル学習で行われているように、学習スキルを宿題として設定してその試行と報告を組み込んでいけば、さらなる学習を進めていくサイクルを設定できる。現地での自らのスキル行使を振り返りながら、調整を図って行ければ、スキル学習の現実的な効果はより高まるだろう。評価者としては第三者以外に、担当教員やクラスメイト、ルームメイトといった、周囲の関係者の意見も興味深いかもしれない。回答方法についても、より丁寧な方法を考えることは可能である。今回の調査は自由記述方式であり、回答は義務ではなかった。そのため無回答の評価者もいた。しかし、セッション中にコメントを求めたり、セッション後にインタビューを実施したり、ビデオを見てもらいながら対話によって意見を聞いていくこともできるだろう。

ネイティブからの意見をどのように求め、どのような観点で分析し活用していくか、そして留学中セッションを考える場合はどのような構成で運用するのかは、今後の課題といえるだろう。

引用文献

- K.S. シタラム著・御堂岡潔訳 (1985) 『異文化コミュニケーション—欧米中心主義からの脱却』 東京創元社
文部科学省高等教育局学生・留学生課留学生交流室「我が国の留学生制度の概要 受け入れおよび派遣」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afeldfile/2011/12/12/1286521_4.pdf
(2012年4月2日閲覧)
- 高濱愛・田中共子 (2009a) 「アメリカ留学準備のためのソーシャル・スキル学習の試み—アサーションに焦点を当てて—」『異文化間教育』 30、pp.104-110.
- 高濱愛・田中共子 (2009b) 「アメリカ留学準備のためのソーシャル・スキル学習セッションの試み—対人関係の開始に焦点を当てて—」『留学生教育』 第14号、pp.31-37.
- 高濱愛・田中共子 (2010a) 「語学研修生を対象としたアメリカン・ソーシャルスキルの学習」『静岡大学国際交流センター紀要』 第4号、pp.81-93.
- 高濱愛・田中共子 (2010b) 「米国留学予定の日本人学生を対象としたソーシャルスキル学習」『一橋大学国際教育センター紀要』 創刊号、pp.67-76.
- 田中共子 (1994) 『アメリカ留学ソーシャル・スキル：通じる前向き会話術』 アルク
- 田中共子・高濱愛 (2008) 「米国留学準備のためのアメリカン・ソーシャル・スキル学習：大学での学習場面への対応を課題とした中級セッションの記録」『岡山大学文学部紀要』 第49号、pp.31-48.
- 田中共子・高濱愛 (2011) 「アメリカン・ソーシャルスキル学習における演技の他者評価(1)：導入的な5スキルに対する学習者のパフォーマンスへのネイティブのコメント」『岡山大学文学部紀要』 第55号、pp.17-30.
- 田中共子・中島美奈子 (2006) 「ソーシャルスキル学習を取り入れた異文化間教育の試み」『異文化間教育』 24号、pp.92-102.

註

1. 本研究は、科学研究費補助金・萌芽研究 No. 19653099 (代表・高濱 愛) の助成を受けた。
2. 上記補助金による研究組織の代表者は本稿の第二著者であり、第一著者はその分担者である。研究の企画・実施・分析を共同して行った。本稿の主な執筆作業を第一著者が担当した。